東南アジアの生態史的枠組

まえがき

巻頭を与えられたのであるから，なるだけ東南アジア全体を包含するものにし，以下に続く諸論文のための下敷きのようなものにしたいと思う．以下，この小論で，私がとり扱いたいのは次の4点である．①東南アジアの生態的地域区分，②生活基盤として見た時の東南アジア，③交易の場として見た時の東南アジア，④東南アジアの社会．

I　生態的地域区分

1　地形，地質に立脚した地域区分

結論から先にいうと，私は，東南アジアは隆起山地，平原，デルタ，火山島，非火山島，島嶼低湿地に分けられると考えている．前三者は大陸部東南アジアにあり，他は島嶼部東南アジアにある．その分布は次頁の図1に示すとおりである．

山地と平原の生成　漂流して来たインドの亜大陸が中国の大陸に衝突した時，その衝撃で，めくれ上ったのがヒマラヤとその周辺の山地である．東南アジアに関するかぎり，この衝突の影響はビルマの大部分，北タイ，ラオス，ベトナム北部に見られる．この隆起帯がここでいう隆起山地である．この山地は多くの所で，高度500mを越え，一部では2000mを越す山脈をなしている．

一方，衝突の影響がなく，比較的平坦な原地形面を残す部分が平原である．平原には，ゆるい波状の地形が続く．隆起山地を除いた大陸部東南アジアの大部分がこれに属すと考えてよい．

大河河口のデルタ　隆起山地に発した河川は，平原をたち割るようなかたち

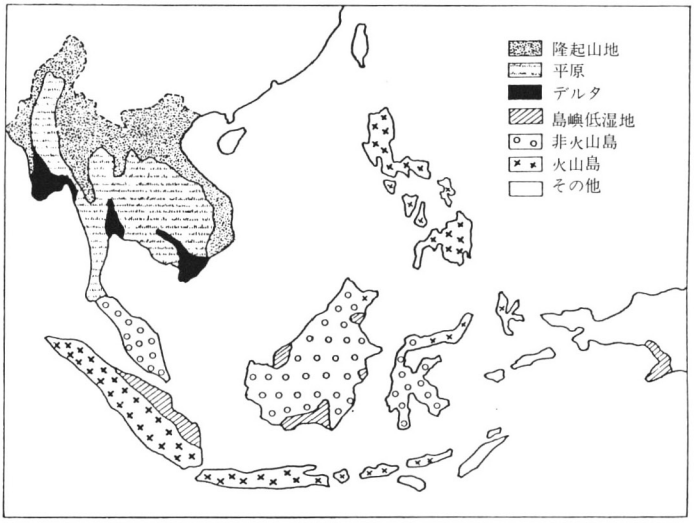

図1　東南アジアの地形・地質区分図（高谷，1985『東南アジアの自然と土地利用』p. 6 より転載）

で流れ，海までの長い距離の間に巨大河川に育つ．そして，河口部に巨大な沖積低地，すなわちデルタを作る．これは海面すれすれのところにできた軟泥からなる一大低平地である．イラワジ，チャオプラヤー，メコンの3河川は特に雄大なデルタを形成する．

火山列島　極めて特殊な例外を除くと，大陸部には火山はない．東南アジアの火山は島嶼部の縁辺にだけあり，それは，スマトラからジャワ，ヌサトゥンガラに至り，そこから北上して，マルク，フィリピンに至っている．この火山列は，実際には，これから更に北に延び，琉球列島から本州，そして，カムチャツカに延びている．実は，アジア大陸地塊の縁辺部には一種の亀裂帯があり，そこに地下の岩漿が噴き上げ，火山列を作っているのである．東南アジア島嶼部の火山もその一メンバーであり，多くは活火山で，しばしば 3000m を越す高峰から噴煙を上げている．

火山地帯の特徴のひとつは，その土壌が極めて肥沃なことである．中部ジャワ以東の火山は特にこの性質が顕著である．

島嶼部海岸湿地の有害土壌　沈水した大陸部であるスンダ陸棚周辺には広大な海岸低湿地が広がっている．最も典型的なものは，スマトラ東岸やボルネオの海岸低湿地である．こうした島嶼部海岸湿地は大陸部のデルタとはその性質を全く異にする．ここには大陸部のような巨大河川がないから，旺勢な土砂供給がない．しかし，多湿であるから植物の成育は旺勢であり，それがピートの堆積を生む．島嶼部海岸湿地の特徴のひとつは，泥の欠如であり，ピートの発達である．

海岸低地の一部は，かつてのマングローブ帯が陸化したものである．そうした所には，強酸性の酸性硫酸塩土壌が含まれている．ピートにしろ酸性硫酸塩土壌にしろ，それらはいずれも，農業的土地利用にとっては有害な要素である．かくして，島嶼部海岸湿地は，見かけの平坦さとは裏はらに，農地としての利用には，問題の多い所である．

2　気候，水理，植生

気候極相としての森林　大陸部東南アジアがモンスーン気候を持ち，島嶼部東南アジアが通年湿潤気候を持つことは，よく知られた事実である．それを反映して，東南アジアの原初の森林はきれいな帯状構造をなしていた．次頁の図2はそれを模式的に示したものである．同図には山地モンスーン林，サバンナ林，熱帯多雨林，島嶼モンスーン林の四つが識別されている．

山地モンスーン林は地形・地質区でいう隆起山地にほぼ一致している．ここには常緑樹が多い．標高の高い所のものは，いわゆる照葉樹林に酷似したものになっている．サバンナ林は平原にほぼ一致している．これは，ほとんどが落葉樹からなる．熱帯多雨林は何万種という多種類の木を含み，密閉した厚い常緑の樹冠を持っている．熱帯多雨林は島嶼部が中心であるが，詳細に見ると，大陸部にも多湿な海岸部には，狭い帯状をなして這い上っている．中部ジャワからヌサトゥンガラにかけては再び，落葉樹の多いモンスーン林が現れる．ここはオーストラリアの風下に当り，島嶼部では珍しく，乾季の卓越する特殊地帯である．

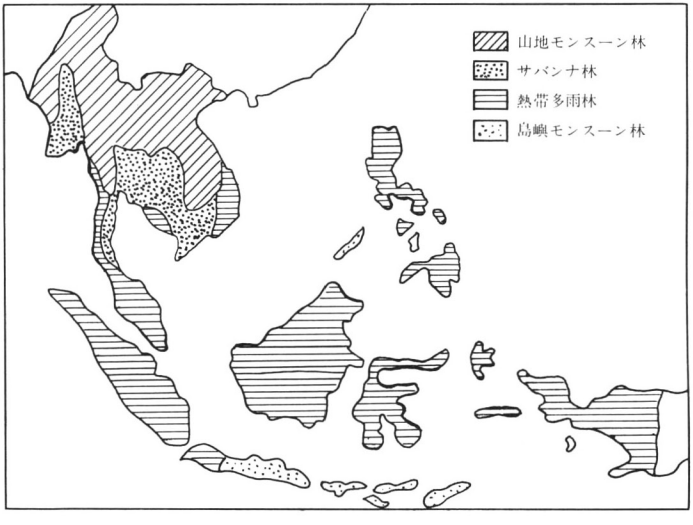

図2　気候極相としての森林

平原，デルタ，島嶼低湿地の水文　水文という観点からして，特記しておかねばならないのは，標記の3地区である．

平原では，雨季が終るとすぐに地表部から水が消える．せっかくの降雨は砂質の地盤に吸い込まれ，砂岩の割れ目に落ち込んでしまうからである．おまけに，平原には河川というものがほとんどないから，乾季の水不足は激烈である．しかし，うまく掘り当てれば，先にしみ込んだ地下水を得ることができる．実際，平原では人々は，長い乾季を地下水で生きのびてゆく．

雨季のデルタには大洪水が起る．デルタはふつう，8月から11月にかけては，その全域が平均1m弱の深さに湛水する．雨季の数カ月間，デルタはしたがって，巨大な湖によく似た格好になる．一方，この大湛水は，乾季になると全部消え，全面が干からびる．

島嶼低湿地は，その多くの部分が通年の常湛地である．浅くたまったその水は腐植をいっぱい含んでいて，コーヒーのように黒い．長時間これに触れていると，体が痒くなってくる．酸性硫酸塩土壌の上にたまった水は，飲むと，ひ

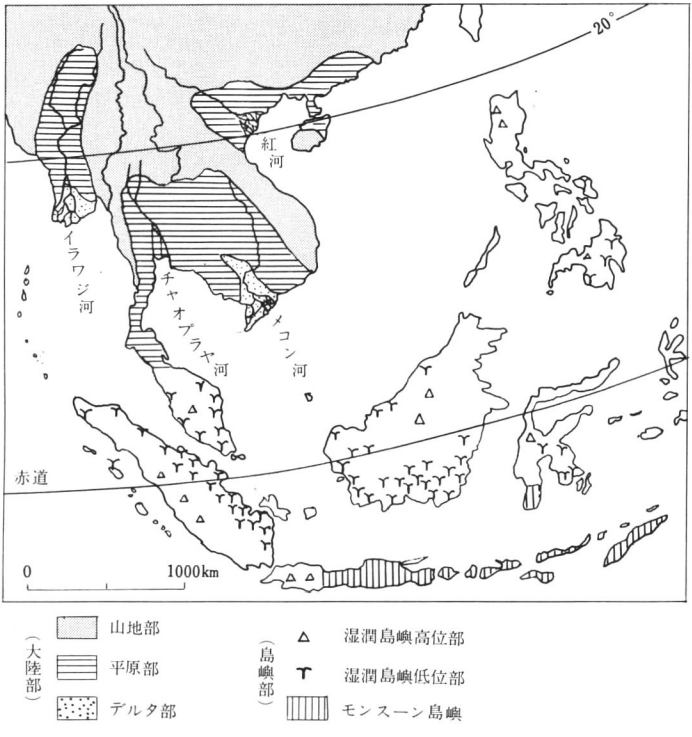

図3　東南アジアの六つの生態区

どいえぐさを覚えさせられる．こうして，この島嶼低湿地は，常湛地でありながら，利用価値のある淡水が極めて得にくい所である．

高冷地　高温多湿な赤道直下でも，高度を上げると常春の地となる．標高1500mの所だと，気温は年中，20°Cぐらいになる．もっとも山の頂に近くなると，常春というよりは，年中霧をかぶった雲霧帯となる．

高標高で温度の低下することは，もちろん大陸部でも同じである．かつてはケシが盛んに作られた，標高1000m以上になると，冬期には凍結を見るようになる．

3　生　態　区

先に設定した地形・地質区に，今述べた気候・水理・植生の要素を加味して，東南アジアを再区分すると前頁図3のようになる．そこには次の6区が示してある．

- 大陸部
  - 山　地
  - 平　原
  - デルタ
- 島嶼部
  - 湿潤島嶼
    - 高位部
    - 低位部
  - モンスーン島嶼

結果的には，大陸部では地形・地質区がそのまま採用されている．一方，島嶼部では，気候・水理条件がより重要視されている．

島嶼部は，まず通年の湿潤区とモンスーン区に二分し，前者をさらに，高位部と低位部に細分している．高位部と低位部の境は，別に明瞭な線を考えているわけではない．おおよそ，標高数百 m から 1000 m ぐらいの間に広い漸移帯をもうけ，それ以上は典型的な高位部，それ以下は典型的な低位部といった格好である．

モンスーン島嶼は，偶然ではあるが，中ジャワ以東の肥沃な火山地帯と一致している．ちなみにいうと，スマトラと西ジャワの火山は，シラス系統の酸性の噴出物を伴うものであり，土壌栄養の点からすると，いわゆる肥沃な火山火帯には入れられない．

Ⅱ　生活基盤としてみた生態区

ここでは，先に設定した六つの生態区，山地，平原，デルタ，湿潤島嶼高位部，同低位部，モンスーン島嶼のそれぞれについて，住み易さと食糧生産適地という視点からみてみたい．

1　住み易さ

住みにくい生態区　デルタと湿潤島嶼低位部は住みにくい二つの地区と考えてよい．

デルタは先に述べたように，毎年，数カ月間は，ほぼその全域が水没する．一方，乾季になると，飲み水がなくなる．こうして，デルタの水文環境は人間の生活に対して，極めて拒絶的である．現に，チャオプラヤー・デルタやメコン・デルタは，19世紀後半になって，運河網建設という一大水理改造事業があって，はじめて人間の居住空間に組み入れられた．自然堤防の発達するイラワジ・デルタは，チャオプラヤーやメコンの場合に比べると，いくぶん条件は良いが，それでも，快適な生活環境というのには程遠い．

湿潤島嶼の海岸低湿地は，第一そこを歩きまわることさえ困難である．巨大な板根が地表を這いまわり，その間に，水びたしのピートがたまっている．人間は板根の上を伝って移動するが，一歩踏み外して，ピートの上に足を置くと，一気に腰まで沈む．ここでは，歩きまわろうとすれば，尾瀬沼に見られるような木道を作ることが必要である．これでは，実際問題として，生活は極めて困難である．それに，先に述べた黒水の問題がある．

デルタにしろ湿潤島嶼低位部にしろ，水面の多いこれらの地区が，マラリヤの危険が大きかったことは古くから指摘されてきたところである．

主要な居住の型　山地，平原，モンスーン島嶼，湿潤島嶼高位部が住み易い場所ということになるが，それらの地区では，人々は次のような住み方をしている．

山地には無数の尾根筋と無数の谷川がある．この山地には二つの型の生活がある．第一は尾根筋の比較的衛生環境の良い所に居を構え，そこで畑を耕し，飲料用の水は谷筋から汲み上げてくるというものである．この型のものは，それほどの大人口になることは期待できない．しかし，古くは，かなり普遍的なものであったようである．第二は，谷筋そのものに居住と生産の場を置くものである．この型の生活を持つグループは，11世紀以降，南中国から東南アジア山地に拡散して来たようである．おそらく，マラリヤに対する防備を固めた人

達のように思われる．

平原は衛生環境という点からすると，かなり良い．乾季の強烈な乾燥がこのことと関係している．しかし，この平原で生活するためには特別な知識を持たねばならない．先に述べた地下水を利用する知識である．この知識を持った時，平原は一気に住み易くなる．東南アジアで最初の大規模な平原居住は6世紀頃に始まっている．東北タイに数百個の数で存在するドゥヴァラヴァティの環濠集落遺跡はその証拠である．平原は，しかし，その生活が井戸や池という人工物に頼っているだけに，一度人災が起ると，その生活基盤が一挙に崩壊する性質を持っている．

モンスーン島嶼は火山群島でもある．火山の水理模型は極めて特徴的である．火山の頂は，たいていいつも雲にかくれていて，そこでは雨が降っている．その雨は降るとすぐに火山岩や巨礫の間に入り込んで地下水となり，そのままゆっくり降下して来て，中腹の傾斜変換点に達し，そこで泉として湧出する．いわば，一つの火山は頂上部に巨大な水槽を持ち，中腹部にいくつもの蛇口を持ったような格好になっている．山が高ければ高いほど，水槽の容量は大きく，安定した水供給が可能になる．モンスーン島嶼の最初の生活の場は，この蛇口の位置にある．中腹部は標高も適当に高く，マラリヤの危険も少ない．東南アジア中で，最も生活に適した所と考えてよい．

常春の湿潤島嶼高位部はたしかに快適な居住環境である．しかし，ここの難点はその厳しい孤立性である．四周を深い熱帯多雨林にとり囲まれた高山の頂では，外界と接触をとることは至難である．

2　食糧生産

東南アジアで考えられる自給食糧は米，雑穀，イモ，サゴである．それらが各地でどういう生産のされ方をするかを見てみたい．

米　山地の灌漑稲作――米は山腹斜面の焼畑でも作られるが，圧倒的大部分は谷筋で水稲として作られる．山地では，谷川に井堰をかけ，そこから水路で田に水を運ぶ，いわゆる灌漑移植稲が中心である．その様子は日本の稲作に

酷似している．こうした手のこんだ稲作だから，反当収量は高い．東南アジアで，これ程安定した高い収量を持つ所は，モンスーン島嶼の火山地帯を別にすると，他に類を見ない．

井堰灌漑には関係農民の共同労働や，配水に関する協議が必要である．こうしたことのために，山地の稲作農村は水利慣行を持った地縁社会が育つ．大きな本流ぞいや，特に谷の広がる盆地では，村落レベルを越えた，より大きな権力，例えば，土侯が直接統御する灌漑施設の作られたことも多い．土侯はこうした水利田から貢租を取り立てた．山地ではこうして，高度に組織された稲作が社会や経済の基盤になる．

平原の天水稲作——流水のない平原では，稲作は雨だけに頼った天水稲作にならざるをえない．井戸や池のまわりにかたまった集落の周辺に広大に広がる水不足の水田で，降雨まかせの稲が作られる．もちろん，こうした水田の収量は年較差が極めて大きい．5～6年に1度襲う旱魃年には，収量はほとんどゼロになってしまう．

水田にならないような高みの疎林は，多くの場合，水牛や牛の放牧地になる．例えば，第二次大戦前の東北タイの場合だと，たいていの家は5～6頭以上の水牛か牛を飼い，それを売って現金を得ていた．水田にあまり頼れないこの環境下で，農民はこの動物飼育に大きな精力をさいた．平原は本来，水牛や牛飼いを主とし，稲作はむしろ従の地区であるといってもよい．

デルタの氾濫稲作——数ヵ月間は1m近くに湛水し，その後は乾き上るというデルタの水理は，熱帯稲の生育のためには理想的である．湛水直前に種子を蒔いておけば，その籾は最初の雨で発芽し，湛水の進行とともに背を伸ばし，花を咲かせ，やがて水がひくと結実する．デルタはしたがって，人間が住めるようになりさえすれば，そこは一挙に大水田地帯になる条件を備えていた．

しかし，巨大すぎる洪水のやって来るデルタでは，その稲作を改良しようなどとするとこれは大変である．例えば，水深を調節して高収量をあげようとか，稲に加えて畑作物を混じ，多毛作化を計ろうなどとすると，もうこれは不可能に近い．要するに，与えられた大洪水をそのままの形で受け入れ，そこで野生

的な熱帯稲を作るかぎりにおいてのみ，有利な空間なのである．

湿潤島嶼の焼畑稲作――湿潤島嶼では焼畑が圧倒的に多い．焼畑では多種類の作物に混じて，稲もいっしょに作られる．また一つの畑は一年耕作すると，そこを放棄して他に移る．再びそこに帰って来るのは10年ぐらい後である．こういう次第だから，まとまりのある大きな稲作地を作るということは不可能である．

ミナンカバウやトラジャのような典型的な常春地では一種の水田が作られる．しかし，それらの多くは，森や焼畑の谷尻の凹地で，こじんまりと箱庭的に作られるものである．しかも用いる農具には焼畑の痕跡をしのばせるものが多い．これらの水田は，焼畑地域の一局部で起った特殊発展型としておいて，大きな間違いはない．

モンスーン火山島の湧水稲作――火山中腹から噴き出る無数の泉から水を引いて灌漑稲作を行っている．稲作環境としては，これ以上の所は無いという程に恵まれている．しかし，ここの灌漑稲作は，水利慣行に支えられた山地のそれとはかなり違う．ここでの灌漑は各自ばらばらに行われていて，まとまった組織はない．

火山島稲作における水利組織の欠如は，おそらく二つのことと関係している．第一は，この急斜面上では適当な貯水個所がなく，したがって，まとまった規模の灌漑システムを作ることが技術的に難しいということである．逆にいえば，無数の泉に恵まれていて，そんな大規模施設の必要がない．第二は，ここには畑作の伝統があり，人々は水稲耕作にはそれほど固執していないということである．このことは次項でもう一度触れる．

火山山麓の水稲耕作はジャワからロンボクにまで認められる．それより東のヌサトゥンガラには，まだ水稲耕作文化は入っていない．

雑穀　ここで雑穀といっているのは米以外の各種穀類のことである．現在ではトウモロコシが圧倒的に多いが，以前はアワが多かったと考えている．

雑穀は大陸部の山地や湿潤島嶼の焼畑でも作られる．しかし，それが食糧として非常に重要な位置を占めるのは，モンスーン島嶼東部すなわちヌサトゥン

ガラである．そこでは雑穀はいわゆる短期休閑畑で作られる．すなわち，ひとつの畑は2～3年連続して耕作すると，2～3年は休耕させるという方法である．この方法は焼畑耕作に似ているが，それとは二つの点で違う．第一は火入れの後に耕起を行なう．第二には，耕地には個人の専用用益権が確立している．

ヌサトゥンガラに見られるこの特異な雑穀・短期休閑畑システムは肥沃な火山土壌と関係している．非火山の貧栄養土壌の上では1年の耕作で10年の休閑を与えなければ地力の回復はないが，この肥沃な火山土壌の上では，2年の耕作に対して2年の休閑で事足りている．こうして，ここでは焼畑よりもより土地生産性の高い短期休閑畑耕作が成り立ち得ているのである．先にジャワの農民が水稲耕作に必ずしも拘泥していないとしたが，その理由はこのことと関係している．実は，ジャワにもこの短期休閑畑の伝統がひとつのシステムとして存在し続けてきたのである．ついでながら，フィリピンも基本的にはこのシステムをかなり濃厚に持っている．

イモとサゴ　現在，穀類を欠きイモとサゴのみに頼っているのはイリアンジャヤだけである．イリアンジャヤのイモ栽培は日本のそれとは比べものにならないくらい丁寧であり，そこには完全なイモ農耕システムができ上っている．イリアンジャヤほどではないにしても，イモやサゴがかなり重要な位置を占める地域は，マルクからスラウェシやボルネオにも広がっている．15世紀の『島夷志略』によると，こうしたイモ・サゴ圏は以前はもっと西にまで広がっていたようである．[1)]

イモ・サゴについて詳述する余裕はないが，ひとつだけ指摘したいことがある．それは，これらは保存がきかず原始的な社会の食糧だと思われがちだが，ことサゴに関しては，このことはかならずしも事実ではない．サゴパールと呼ばれ，真珠状に丸めて煎られたサゴは，2～3年の保存にも容易に耐え，しかも調理なしででも食べられるということのために重要な戦略的食糧になっている．サゴパールを主歳入源とした王国というのは聞いたことはないが，サゴパールが南海の航海者達の不可欠の携行食糧であったというのは有名な話である．サゴが香料貿易に関連して重要な位置を占めていたことはまず間違いない．

Ⅲ　交易の視点から見た東南アジア

最初にどんな特産物がどこにあるかということを概観したい．そして，次に交易ルートについて見てみたい．

1　特　産　物

東南アジアの特産物を，香料，その他の天然産物，プランテーション作物と区分して，その産出状況を見る．

香料　今では，東南アジアの産物のなかで，香料の地位はずいぶん低くなってしまった．しかし．プランテーション作物の出現前には，香料は圧倒的に重要な意味を持っていた．『南海香薬譜』は「一二二五年に編された趙汝适の『諸蕃志』は「志物」で当時南海から輸入されたる主要物品，四七品をあげ，この内三一品目は香薬である」[2] としている．すくなくとも南宋時代には，南海物産の中で香料の重要性は完全に確立していたようである．同書はさらに続けて，香薬の中でも圧倒的に重要であったのが沈香であったとしている．

沈香は古くはインド人によって，アッサムあたりで集められていたようである．それが後には，テナセリム，マレー，さらにスマトラやボルネオからも集められるようになった．[3] 中国の唐・宋代の漢籍に現れる沈香産地は海南島から安南山脈が中心で，島嶼部東南アジアにも至っている．沈香は大陸部沿岸山脈の多雨林から湿潤島嶼にかけて広く産出があったと考えてよい．

沈香が焚香の王者なら，丁香（丁子）はスパイスの王者である．後漢の頃には既に口臭を消す妙薬として使用されていたという．しかし，丁子が極めて多量に求められるようになるのは14～15世紀からだという．[4] 当時秋になるときまって多量の牛や羊を殺して塩漬けにしていたフランドルや北ドイツの人達が，肉の腐臭防除のために大量の丁子を使うようになったのである．この膨大な丁子需要は，サイロの発明で冬期の飼料確保が可能になるまで続いたという．

丁子はマルクにしか産しない．このために，マルクは列強の争奪の的となっ

た．16世紀初頭，ポルトガルが東南アジアに進撃するのは，まさにこのマルク獲得が目的であった．出発に一歩遅れたスペインは，太平洋まわりでマルク接近を計ったが，果せず，フィリピンに到達した．

沈香，丁香についで重要なものに，肉桂，肉荳蔻，竜脳，安息香等がある．これらの産地も沈香のそれに似ている．南海物産の中心をなす香料は，こうして，その主産地が湿潤島嶼から，その延長である大陸部沿岸山脈の多雨地帯ということになる．

その他の天然産物　香料以外の東南アジアの産物には次のものがある．

島嶼部で最も重要なものは金である．これはスマトラやボルネオから出て，古くから極めて有名である．同じような地域から錫も出る．西インドネシアの金や錫に対して，東インドネシアの海域では，中国人による真珠や亀甲やナマコ，燕巣の採取が活発であった．チモールやフローレスからは白檀を多く産した．

大陸部では紫鉱と黄臘が重要である．紫鉱はラックのことで，これはカイガラムシからとり，ワニスの原料にする．黄臘は大陸部に限るわけではないが，花の多い平原や山地に特に多い．山地からは麝香が出る．時代がぐっと下って，タイではアユタヤ期以降になると，平原からの皮革輸出が大きな品目になった．こうして，大陸からも，いくつかの産物が出る．しかし，この分野でも大陸からの産物は島嶼部のより高価な物産には及ばない．

プランテーション作物　プランテーション作物が本格的に伸び出すのは産業革命以後である．しかし，プランテーション作物を商品用栽培作物という意味にとると，その歴史は極めて古くなる．

コショウは紀元1世紀には西方世界ですでに重要な輸入品になっていた．この頃は多く，インドから西方に輸出されている．コショウはその原産地がマラバールともスマトラともいわれるが，これは遅くとも『諸蕃志』の時代には原産地から広がって，本来なら適地でない中東部ジャワにまで大々的に広がっている．[5] コショウが本格的なプランテーション作物になるのは，12～13世紀からのようである．

マルコポーロによると宋代の杭州は同時代のヨーロッパ全体の消費量の100倍のコショウを輸入していたという．マルコポーロの誇張を差し引いたとしても，13世紀の南中国が，極めて大量のコショウを輸入していたことは確かである．そして，14世紀に入ると，先に述べたフランドル地方からの需要が急増する．さらに下って，オランダ時代になっても，これは重要な栽培作物である．オランダ東インド会社は，強制供出制度を適用して，コショウの集荷に力を入れた．

歴史的に見ると，コショウの次に現れるのがコーヒーである．コーヒーは17世紀最末期，アラビヤからジャワに導入され，西ジャワで栽培されるが，1840年代にはスマトラにも広がる．しかし，1870年には病気が広がり，折しも，南米産コーヒーという競争相手の出現で大打撃を受けた．

コーヒーを置き換えるかたちで，しかし，それより少し低標高に広がるのがゴムである．これは20世紀の初頭，マレー半島，スマトラ，ボルネオに急速に広がった．マレー半島にいたっては，1920年には，その全耕地の65％をゴムが占めるという状態に至っている．

コーヒーにしろゴムにしろ，これらの作物の導入は，それまでの湿潤島嶼の焼畑社会を根本的に変えてしまった．以前は森の中を移動していた焼畑集落が，コーヒー園やゴム園を作り，その中に定着しだす．いわゆる商品作物栽培集落に変ってゆくのである．

プランテーションの今ひとつの典型はジャワの砂糖キビ栽培である．ジャワでは19世紀中葉より，既存の水田が次々と砂糖キビ畑に変えられていった．砂糖キビ栽培は古くから華僑によって行われてきたものであるが，それが大規模に組織的に行われるようになったのは19世紀中葉以降である．オランダ人達は，ジャワ人達が持っていた旧来の水田用灌漑設備を，砂糖キビ用のより大規模な施設に変えていった．さらに，軌道を敷設し，道路を整備し，港を新設した．要するに，豊富なジャワ人労働力を徴発することによって，ジャワの国土改善を強力に押し進め，もって糖業経営のより高い効率を追求したのである．ジャワ糖業は，この結果，驚異的な発展を示した．しかし，一方では，犠牲を

強いられた稲作は悪条件に悩みながら生きねばならないことになった．

ジャワと同じような糖業の発展はフィリピンにも見られる．マニラ湾岸北のパンパンガには18世紀初め，中国人の糖業が始まり，それに少し遅れて，ネグロス島にも糖業が始まった．ネグロスには，その後，20世紀初頭アメリカ資本の導入があり，この島の大半を砂糖キビ畑に変えてしまった．ジャワにしろフィリピンにしろ，肥沃な火山性土壌とモンスーン気候という二つの利点を最大限に利用した草本プランテーション作物の栽培が，そこで行われたのである．

こうしてみると，プランテーション作物の栽培は，大陸部にはほぼ完全に欠落していたように見える．しかし，実際にはそうではない．19世紀後半に登場して来るデルタ米は商品米であり，プランテーション作物以外の何物でもない．こういう観点からすると，19世紀後半以降の東南アジアは，その全域がプランテーション作物で席捲されたといっても過言ではない．

2　交易路と港

東南アジアの交易を考える時には，二つのものを区別しておいたほうがよい．東西交易と域内交易である．

東西交易　最も古くは中国の絹と西方の宝石やガラス製品が交換され，やがて，中国の陶器やインドの綿がそれに加わった．この東西交易には二つのルートがあったと考えられる．

それは海路と陸路である．海路の場合，紅海を出た船は南インドをまわり，マラッカ海峡地域を通過し，広東に入っている．このルートの開設は早い．例えば紀元1世紀の『エリュトゥラー海案内記』[6]には，航海者達がインド南端の港で中国の絹を得ているのが見えている．また東南アジアそのものでは，紀元1～2世紀に比定されるメコン・デルタのオケオ遺跡からローマの貨幣やサンスクリットで書かれた荷札が出土している．

もっとも，この頃の航海者達がマラッカ海峡そのものを通過したか否かはわからない．何故なら，このルートぞいで，はっきりした遺物の出土があるのはメコン・デルタであり，あるいはタイ湾の最奥部であるからである．沿岸航海

に頼っていた時代には，南シナ海とベンガル湾は，マレー半島横断で結ばれていたのかも知れない．このことも含めて，マラッカ海峡地域経由ということにしておこう．ちなみにいうと，はっきりとしたマラッカ海峡国家スリヴィジャヤが出現するのは7世紀である．

一方，陸路はアジアの地形図を広げると，極めて明瞭なものが浮び上ってくる．それはチベット高原東縁を画する断層崖直下を，直線状に北北東・南南西に伸びる線である．北の終点は長安であり，そこから成都，雲南に下り，さらにメコン，サルウィンの上流を横切り，イラワジ河ぞいにベンガル湾に出ている．この直線にそっては中国有数の大都市が連なっている．いうまでもなく，これは中国とインドを結ぶ最短距離でもある．こうした所が交易路になるのはごく自然なことであろう．

南詔史の研究家，藤沢義美は，「後漢・三国・晋代頃に，今の雲南省西部地方へビルマ人や印度商人が入り込んでいた形跡は，さきの史料中に“僄越”や“身毒之民”とみえることから認められるのであって，この頃すでにビルマ・ルートを通じて東西文化の交流や物資の交易が相当行なわれていたらしい」[7]とし，漢代末にビルマ産宝石や梧桐木（カポックか）が中国に輸入されていたことを示している．藤沢によると，こうした雲南が独自の王国，南詔として栄えるのは7世紀中葉から9世紀初頭である．

域内交易　域内交易が極めて活発になるのは，中国の重心が揚子江の南にうつる宋代になってからである．この頃発生する華中や華南の巨大都市が南海物産を大量に求めたからだといわれる．東南アジアへの華僑の進出が始まるのも，まさにこの時だといわれている．しかし，ここではむしろ，それに続く元から明代のことを問題にしたい．その時，東南アジアに極めて重要な変化が起ると考えるからである．

南宋が滅び元になっても巨大都市での需要は滅びない．しかし，南宋ほどの交易のにない手はいなくなる．ここで始めて，その空隙を埋めるようにして現れるのが東南アジアの在地勢力である．結論的にいえば，それはアユタヤとマジャパヒトの勃興であると私は考えている．この間の様子をいま少し詳しく見

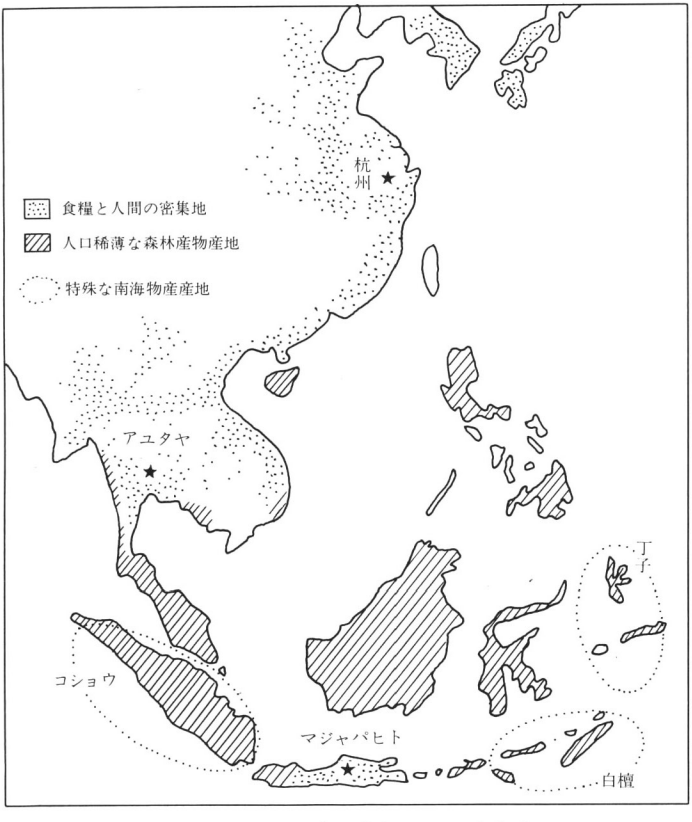

図4　12〜14世紀の東南アジアと南中国

てみよう．

図4で斜線をほどこした所は森林産物の主要産出地である．ここには高価な特産品はあるが食糧がない．逆に，点の模様をつけた所は食糧があり人間は多いが特産品はない．ところで，12世紀段階では，この森林・南海物産の集荷はもっぱら杭州が行っていた．しかし，やがて，そのシステムが崩壊する．すると杭州にとって替るようなかたちで，アユタヤとマジャパヒトとが登場して来る．アユタヤもマジャパヒトもともに食糧と人間を多く持つモンスーン地域にあり，しかも，そのすぐ前面には特産物を産する多雨林地域をひかえている．

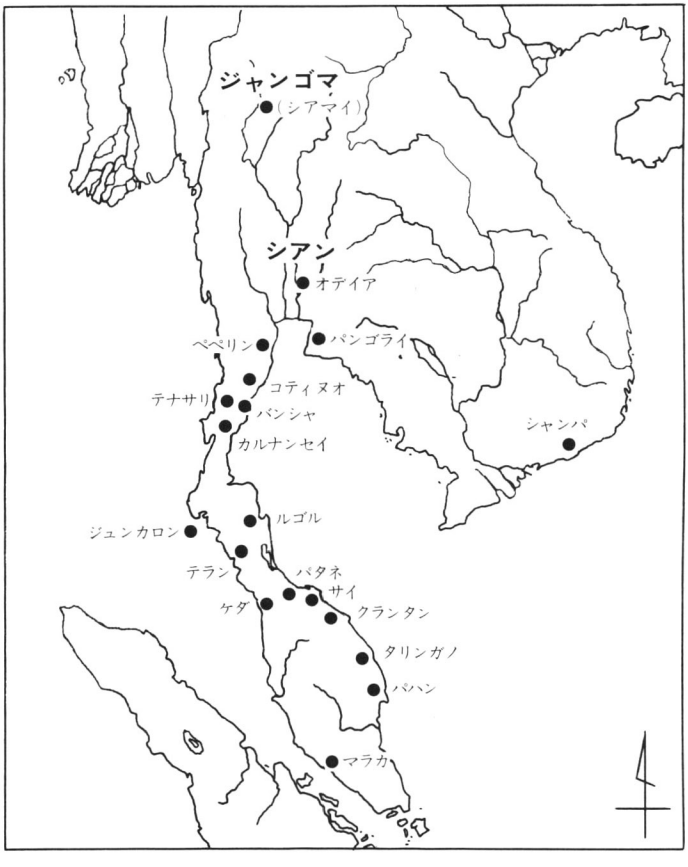

図5　16世紀初頭のシャム湾ぞいの港（生田ら訳『東方諸国記』p. 219 の図を簡略化したもの）

この関係をより詳しく見てみよう．トメ・ピレスの『東方諸国記』にはアユタヤに関して次のような記事がある．

「第二はロゴルの副王でポヨヤと呼ばれる．彼はパハンからオデイア〔アユタヤのこと〕に至るまでの支配者である．パハン，タリンガノ〔中略〕，パンゴライその他の港にはそれぞれに王のような領主がいる．かれらのあるものはイスラム教徒であり，あるものは異教徒である．〔中略〕そしてこれらの場所からパ

タネまでの地域では毎年七八百バールに及ぶ胡椒を産する」.[8)]

この様子は図5に示されている．上の記録で見てみると，多雨林のマレー半島にはコショウを出す港が多く出来ている．そして，そこの港の領主は時にイスラムである．南宋の崩壊と時を同じくして，イスラムの進出が見られる．そして南宋時代以降ひき続く華僑の港もある．ところで，アユタヤやマジャパピトの役目はこういう群小積出港に対する軍事的統率者であり，同時に食糧補給者であったと私は考えている．アユタヤやジャワが大きな人口を有し，豊かな米産地をひかえていたことは，彼等をしてこのことを可能ならしめた．

くわしく見ると，アユタヤとマジャパヒトの間には差がある．時代の流れはアユタヤにより幸していたかのようである．アユタヤにはタイ湾岸の群小積出港の総元締という以外に，今ひとつ，全く新しい要素が加わってきたのである．それはかつて，長安，四川，雲南，ベンガル湾と連らなっていた内陸ルートへの連絡が可能になったことである．

南詔の崩壊後も雲南の人口は膨張し，その分布域は南に膨れ上っていた．いわゆるタイ族の南下が起っていた．そして，遅くとも12世紀にはその集団はチャオプラヤー河源流地帯に広がって来る．こうして，12世紀にはこのあたりは南中国の人口稠密地帯の南縁という格好になる．遡行可能なチャオプラヤー水系はこの時点で交易の一大幹線ルートになった．源流地帯自体が市場になったし，さらにそこから中国への直通ルートが開設されることになったからである．『東方諸国記』はチェンマイ（図5のジャンゴマ）について次のように言っている．

「麝香はジャンゴマ王国や〔原文空白〕王国から〔アユタヤへ〕来る．また麝香は同地からシナへも行く．人々は銀と白檀がペグーとシャンを経由して，陸路でシナの内陸部に行くと断言しているが，これには根拠があるように思われる」.[9)]

実際，このチャオプラヤー・ルートの開通はアユタヤ期より早く，13世紀末のスコタイ期には始まっているらしい．スコタイが南タイのナコンシタマラートをその領域に収めていたと豪語するのは，そのことを意味しているに違いな

い．

ジャワの場合，内陸に居を構えた王は北海岸にやって来る商人達を歓迎したようである．この傾向はすでにシンゴサリ期に始まっているが，最も顕著に典型的に現れるのはマジャパヒト期のようである．すくなくとも，マジャパヒト期に入ると，こうした港への販売を目的とした米生産を王が意欲的に始めた節がある．[10]

このようにして，12～13世紀以後，域内交易はぐっと盛んになる．そして，特に14世紀以降になると，人間と米を持った領域国家が交易の前面に出てくる．これは東南アジア史における一大画期であるといってもよかろう．もっとも，この時期に至ってもいわゆる仲継港型のものが消滅したわけではない．13世紀スマトラの三仏斉がそれだろうし，15世紀に現れるマラッカ王国がそれである．

Ⅳ　社会・国

おそらく専門家の間では，社会や国に関しては厳格な定義があるに違いない．私はそれに関しては全く無知であるが，自分なりに植民地支配以前の東南アジアの中には，財の集積に関していくつか性格を異にする社会や国があったと思っている．私のイメージからすると，それらは次の六つに分けられる．

領域型のもの
- 部族社会
- 土侯国
- 平原帝国

交易型のもの
- 版図拡大型交易国家
- 海峡国家
- 特産品積出港国

部族社会　今日の北タイの山地民などのことを考えている．例えば，アカやミャオやホーをとってみよう．彼等はふつう同族を中心にまとまっていて，きまった生活，活動領域を持っている．彼等の一部はケシ等を作ったりして経

済的に豊かであったり，又，高い文化を持ったりしている．しかし，その集団が国家を形成するほどには至っていない．また多くの場合，特定の国への忠誠心をもあまり持っていない．こういう集団をここでは仮に部族社会としている．大陸の山地だけでなく，島嶼にもこの類の社会は多い．焼畑のような粗放な生業形態と関係あるようにも見える．

土侯国　典型的には，12～13 世紀以降の山間盆地に現れたタイ系土侯国のようなものを考えている．地域の水稲生産性を上げるために，灌漑水利の充実を軸に人々は協力する．集落は一旦成立すると長期に安定して存続することが多く，しばしば高度に発達した地方文化をはぐくむ．

やや似た状況は，古代のジャワにもあったのではなかろうかと考えている．ジャワでは一つの主権のセンターは，基本的には一つの火山からなっている．一つの火山は農業水利の一単位であると同時に，その山頂は古代ジャワ人の宇宙の中心でもあった．

もっとも，これをあまりに閉鎖的に考えるのは間違いである．チェンマイは中国貿易の通過点になっていたし，古代ジャワもいたる所で海に露出していた．交易の要素は否定しないが，あくまで地域経済の基盤が農業であり，しかも地理的にディスクリートな境界を持つ地域，そんなものを，ここでは土侯国と呼んでいる．

平原帝国　アンコール期のクメールを典型例だと考えている．ビルマのパガン王国もこの類であろう．強力な国王を持っていたこと，東南アジアでは他に例を見ない広大な版図を持っていたこと，そして，その版図が強力な軍隊によって維持されていたこと，などから帝国という言葉を用いている．

私は，帝国の発生は平原の生態と関係していると思っている．平原の“見渡せる”という性格が帝国成立の生態的基盤をなしているといいたいのである．平原のあの広大な緩起伏地の高みに立って，周りの 360 度を見渡し，そこに小都市や村の散らばりを見る時，少し覇気のある者なら必ず征服欲にかられる．そこを征服すると，更にその先に同じような景観が広がり，又それも征服しなければおさまらなくなる．こうして，平原全体を征服した時，始めて征服は止

む．しかし，その時はすでに広大な版図が出来上ってしまっている．これが平原なのである．

版図拡大型交易国家　このなじまない言葉で，私が言わんとしているのは，先に少し議論したアユタヤやマジャパヒトの類である．輩下の港に自らの食糧を供給し，自らの軍備や時に傭兵で周辺の治安の維持を計り，かくして，交易の庇護者兼支配者であるような国家をいっている．同時期のペグーも似たようなものだろうと考えている．

この類の国家は，もしその後のヨーロッパ植民地勢力の干渉がなければ，かなり大きく発展したに違いない．しかし，実際には植民地勢力の干渉でそれは挫折した．アユタヤはその後チャオプラヤー・デルタに進出し，バンコクを都とするが，四周を押さえ込まれ，単なる米プランテーションの中心になってしまった．ビルマのイラワジ・デルタの場合は，19世紀中葉，国土そのものがイギリスの手に渡り，イギリスの経営する米プランテーションの場になった．かつてのマジャパヒトもイスラム化した港湾勢力の反撃を受けて分断された後，結局はオランダの手に移り，急速に砂糖キビプランテーションに変えられてしまった．

モンスーン熱帯と湿潤熱帯の接合点に位置し，モンスーン域の領域性と湿潤熱帯域の交易性の両方を生かして，版図拡大型交易国家として成長しだしたいくつかの国は，こうして，植民地勢力の到来とともに，その発展の芽をつまれてしまった．

海峡国家　ここで海峡国家としているものは，マラッカ海峡ぞいに発生する強力な港市国家という意味である．たとえば，スリヴィジャヤや三仏斉である．

こうした海峡国家は帝国とはおよそ対極にある．これ程戦略的に重要な位置を占めた国であるにもかかわらず，その主都の位置は未だに確実に比定されていない．スリヴィジャヤは一応パレンバンに，三仏斉はジャンビに比定されてはいるが，異論も多い．どうやら実状は，その時々の情勢によって，その拠点を転々と変え，あるいは，複数の拠点を持っていたようである．おまけに拠点

を形成していた人も，その多くは筏の上などに住んでいたらしい．巨大な石造建築のモニュメントを築いた帝国とはずいぶん違う．

この海峡国家は15世紀にはマラッカ王国として生きている．しかし，16世紀には早くも植民地勢力のおさえる所となり，以後，植民地勢力の戦略拠点としてのシンガポールやジャカルタへとひきつがれてゆく．

特産品積出港国　湿潤島嶼には，前記の海峡国家の外に多くの中小の南海物産積出港がある．それらの多くはマングローブの中の河口部に位置している．この位置は大切である．何故なら，ここのみが飲料用の淡水の確保ができ，またその川筋を伝って内陸の森林へ入り込めるからである．

もっとも，こうした河口集落も単独で存在していることはほとんどない．ふつうは散在する十数個から数十個の河口集落が一つのまとまりをなし，そのグループの要として王宮のある港町が一つある．こうした積出港は，時に内陸高地の集落とも連絡している．私の知る南スラウェシのパロポの例だと，数十個の海岸ぞいの集落をしたがえ，背後のトラジャの山地とも連絡をとっている．海岸の集落はサゴを食して生活し，ダンマールや籐などの森林物産をパロポに出している．海岸集落のあるものはまた塩干魚を作り，湿地林で水牛を飼っている．そしてこれらをトラジャの高地に持って上る．トラジャからは，山地産の米をパロポに持って降り，そこで日用雑貨にかえて，それを村に持って帰る．パロポの王は大船を持っていて，集まった森林物産をジャワや中国に売り，インドの布や中国の陶器，雑貨を購入している．時にタイの米が入って来る．こうした森林物産の積出港は，13～14世紀には出来上り，第二次大戦前まで続いた．[11)]

パロポはほんの一例である．島嶼部にはフィリピンを含めて，この種の積出港が無数に出来た．なかでもボルネオのブルネイやミンダナオのザンボアンガ等は長い歴史を持っていて有名なものである．

表1　東南アジアの六つの生態区の自然環境，居住性，主要生産物，社会の一覧表

生態区	自然環境	生活の難易	食糧生産	特産物	植民地支配以前の社会と国
山地	谷筋には通年の流水あり	谷川にそえば易	灌漑移植稲（と焼畑）		土侯国（と部族社会）
平原	見通しのきく高燥地	地下水利用法を知れば易	水牛・牛飼育と天水稲作	水牛・牛	平原帝国
デルタ	雨季の大湛水と乾季の完全乾燥の季節的交代	住み場所なし難	人造空間における氾濫稲作	19世紀中期以降商品米	平原との接点に版図拡大型交易国家
湿潤島嶼高位部	高冷地	孤立をいとわねば易	焼畑と畑		部族社会
湿潤島嶼低位部	通年の高温・多湿．有害土壌あり	瘴癘の地で難	イモとサゴ	各種森林産物，コショウ，コーヒー，ゴム	特産品積出港と海峡国家
モンスーン島嶼	肥沃な火山灰土と豊富な湧水	易ときに快適	稲と雑穀	19世紀以降砂糖プランテーション	土侯国から版図拡大型交易国家へ

V　まとめ

以上の議論を表1にまとめてみた．それは生態環境の上に生活と交易がいかに行われているかを概観している．

ところで，この表に加えて，その歴史について，私がおぼろげながら持っているイメージについて，最後に一言つけ加えておきたい．私は上の六つの生態区の上に展開した東南アジア史を次の如く考えている．

まず最初，10世紀までは交易の時代である．これはどうやら二亜期に分けたほうがよい．第一亜期は沿岸航海の時代であり，航海者達はマレー半島を陸路で横断している．第二亜期に入ると，東西交易の船はマラッカ海峡そのものを通っている．典型的海峡国家スリヴィジャヤが隆盛を極める．もっともこの交易時代には海路だけでなく，ビルマ・雲南ルートのことも忘れてはならない．このルートには南詔王国が栄え，それは次に来る，山間盆地の土侯国時代の前

史を作っている．

10～13世紀を内陸帝国の時代と呼ぼう．平原にはアンコールやパガンの王朝が栄えた．ジャワにはシャイレンドラ，クディリ，シンガサリという火山山麓の王朝が続いた．この時期，東南アジアに交易がなかったわけではない，南海物産の積出しは，実のところ，この頃から飛躍的に増大する．ただ，私はこうした南海物産は南宋という東南アジアの外にある交易国家の主導によって行われていたと想像している．

13～17世紀は，いわゆる版図拡大型交易国家の時代である．前二時代の交易性と領域性を合せ持った国家が生れる．典型的にはアユタヤとマジャパヒトである．山間の土侯国チェンマイ等も多少はこの性格を持っている．

18世紀以降，東南アジアは植民地勢力の干渉で混乱の時代に入る．19世紀後半になると，植民地経済の中で生きる巨大都市，ラングーン，バンコク，サイゴン，ジャカルタ，マニラ等が大膨張してくる．

以上が私のイメージする東南アジア生態史である．

あとがき

ここに書いたもののうち歴史に関する部分は多く，「漢籍を読む会」（石井米雄，桜井由躬雄主宰）から学んだものである．このことは明記しておきたい．しかし，だからといって，この会が今私が書いた所と同意見であるというわけではない．むしろ多くの点で両者の間には考えの隔たりがある．しかし，それにもかかわらず，この会から教えられた所は絶大である．考えてみると，歴史学者の友人からだけでなく，人類学者，社会学者，政治学者達からも，折にふれいろいろのことを教えてもらった．社会，国について記したところはそうした人達から得た耳学問に頼っている．ここに記して，こうした友人に感謝の意を表したい．

注

1) 高谷好一，1985『東南アジアの自然と土地利用』，勁草書房，p. 231.
2) 山田憲太郎，1982『南海香薬譜』法政大学出版局，p. 5.
3) Burkell, I. H., 1966, A Dictionary of the Economic Products of the Malay Peninsula, pp. 199～200.
4) 山田憲太郎，前掲書，pp. 334～336.
5) 趙汝适，『諸蕃志』.
6) 村川堅太郎訳，昭21，『エリュトゥラー海案内記』第56節，生活社，p. 119.
7) 藤沢義美，1969，『西南中国民族史の研究』大安，pp. 525～526.
8) トメ・ピレス，『東方諸国記』(生田滋ら訳)，1966，『大航海時代叢書Ⅴ』岩波書店，p 219.
9) トメ・ピレス，上掲書，p. 222.
10) 高谷好一，前掲書，pp. 238～239.
11) 高谷好一，1984，「サゴヤシ湿地の生活」『グリーン・パワー』No 12，森林文化協会，pp. 38～41.

(高谷　好一)